

玉里文庫本古筆源氏物語 (鹿児島大学 附属図書館蔵) 再考 (一)

武藤 那賀子

はじめに

鹿児島大学附属図書館が所蔵する玉里文庫本の古筆源氏物語は、鎌倉時代から南北朝時代に書写されたものと考えられている、全一五帖〔空蟬〕〔花宴〕〔賢木〕〔須磨〕〔関屋〕〔絵合〕〔松風〕〔玉鬘〕〔初音〕〔野分〕〔藤裏葉〕〔若菜下〕〔夕霧〕〔匂宮〕〔紅梅〕の取り合わせ本である。当該本については、徳光澄雄が書誌調査および本文の傾向を調査し、新美哲彦が「空蟬」巻に焦点を合わせて陽明文庫本と比較している。また、伊藤鉄也が画像をサイトに掲載している。公開されている画像を見る限り、当該本は綴葉装であるのに、徳光論では粘葉装とされているなど不審な点があったため、本稿では改めて書誌を整理し、またそこに考察を加えていく。なお、第一帖から第七帖を扱う。

一 共通書誌情報

古筆源氏物語全一五帖に共通する書誌を以下に掲載する。

- 【箱】 かぶせ蓋桐箱 (幅二〇・四cm × 奥行二〇・三cm × 高さ一四・八cm、蓋の高さ二・二cm)。蓋中央上部に「古筆

【折紙】

源氏物語」と墨書、右下に玉里文庫の請求番号の貼紙。側面に貼紙を剥がした痕跡 (幅約五・〇cm、高さ二・五cm。右下から左上に向かって破られている) があり、辛うじて「亀」という字の朱正方 (あるいは長方) 陽刻印が読み取れる。また、その印の左には墨書の跡があるが、判読できるほどは残っていない。江戸時代後期のものか。

縦一五・五cm × 横四九・〇cmの楮紙に以下のように書かれている。



後醍醐天皇宸翰

一 須磨 墨付七十八枚

後伏見院宸翰

墨付六十五枚

一 齋宮の御くたり

安嘉門院四条殿阿仏

一 夕霧

キーワード：玉里文庫、書誌、古筆了意、古本系源氏物語

- 二条家葉門覚源
 - 一 若菜
 - 冷泉為相卿
 - 一 藤の裏葉
 - 同
 - 一 野分
 - 同
 - 一 玉かつら
 - 為定卿
 - 一 匂宮
 - 同
 - 一 紅梅
 - 世尊寺行俊卿
 - 一 松風
 - 行房卿
 - 一 花の宴
 - 同
 - 一 空蟬
 - 同
 - 一 関屋
 - 同
 - 一 絵合
 - 行尹卿
 - 一 初音
- 合十五冊

【装 訂】

綴葉装。

【外 題】

金採み箔散し(ただし、中央に箔はほぼない)の題簽あり。表紙に糊で貼られたうえに、上下を糸で綴じられている。字はない。

【表 紙】

右下に鹿児島大学附属図書館の請求番号が貼られている。

【極 札】

青の二重の雲紙の極札が上下二か所を糸で綴じられており、これが内題の役割を果たしている。上部に巻名。その下に二行書で、右には伝承書写者、左は一字ほど下げて、巻の冒頭の数字を墨書。その下に「琴山」印。裏面には、朱割印が右上に押され、中央に「六半本 甲申二」と墨書、その下に「古筆九■隠居■」と刻印された黒楕円印。

【蔵書印】

ナシ。

【奥 書】

ナシ。

折紙に書かれた巻順は、「源氏物語」の巻順ではなく、伝承書写者を重視した順番である。^(注7)これは、当該本が一五帖になってから作られたものであることが要因であると考えられる。

極札の「琴山」印を、徳光論では初代古筆了佐としている。しかし、極札の筆跡は了佐ではない。筆跡と極札の裏の黒楕円印の「古筆九■」という刻印から、この極札は九代目古筆了意(一七五二—一八三四)のものであるといえる。了意の生存期間に「甲申」の年は一七六四年と一八二四年の二回ある。黒楕円印に「隠居」とあることから、一八二四年二月の鑑定であると考えられる。

装訂は、徳光論では粘葉装とされていたが、綴葉装である。複数の折同士の背が糊で貼り付けられている箇所がある。

二．各帖書誌

各帖の書誌を載せる。ただし、前節で指摘した点については割愛する。なお、巻名の下に、サイトでのコマ番号を漢数字で掲げておく。

①「須磨」巻（二・六〇八五_(巻)）

【作品名】 『源氏物語』 「須磨」巻

【請求番号】 天二二三 一三六一／一五（一）

【外題】 縦一・五cm×横二・八cmの題籤。また、上下にそれぞれ二か所針穴（上部二・二cm、下部二・二cm）がある。

【内題】 見返のノド近くに、縦一四・四cm×横二・二cmの極札。上部に「須磨」、その下に二行書きで「後醍醐天皇宸翰／よのなかいと」と墨書。その下に「琴山」印あり。

この札は、上下にそれぞれ二か所ずつ穴を空けたところ（幅は上部一・四cm、下部一・五cm。）に糸を通して見返に付けられている。

【書写年代】 鎌倉時代中期～室町時代前期

【残存状態】 六七丁目の次の丁が切り取られている。ただし、本文自体に欠落はない。

【装訂】 綴葉装 一帖

【表紙】 錆鉄御納戸（緑みの暗い鈍い青色）の無地

【見返】 本文共紙。

【本文料紙】 鳥の子紙。

【寸法】 縦一六・二cm×横二五・七cm

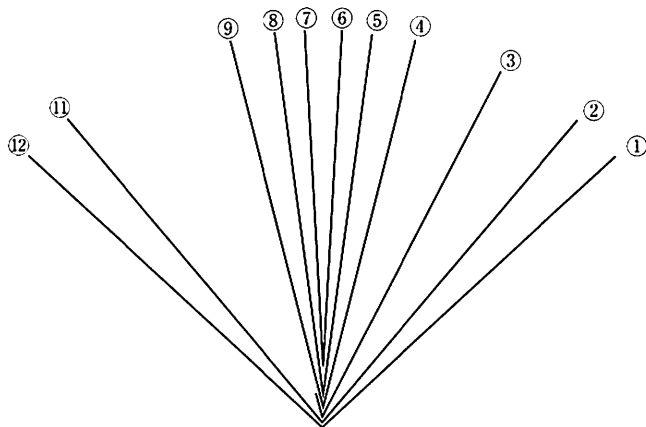
【字高】 約一三・五～一四・〇cm

【一行字数】 一行あたり二一～一五文字（一筆）

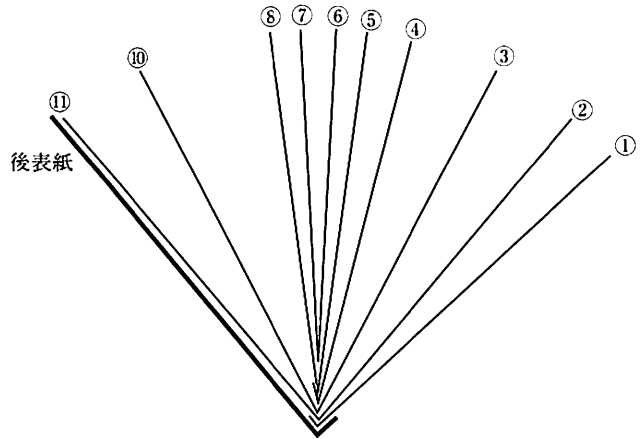
【和歌表記】 歌は二行書。行頭は一字弱下がる。地の文には続かない。

【丁数】

全七折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙に直貼りされている。第一～五折は六紙からなる。第六折は、五紙と一丁からなる（図一）。第七折は、四紙と二丁からなる（図二）。後遊紙二丁。このため全七九丁、墨付七七丁となる。



（図一 第六折を地から見た図）



〔図二 第七折を地から見た図〕^(注9)

【朱点】 一〜二丁目までは濃い朱点が見られるが、それ以降はほとんどなく、あっても薄い朱点のみである。

【書入】 後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】 半葉行数は、十行。ただし、第四一丁ウラのみ二行。墨付最終丁である第七七丁オモテは四行。

【保存状態】 良。

【その他】 折同士の背が糊で貼りつけられている。また、文字が小口に近い。

②榊巻 (八六〜一五六)

【作品名】 『源氏物語』「榊」巻

【請求番号】 天二一三 一三六一／一―五(二)

【外題】 縦一・六cm×横二・八cmの題籤。また、上下にそれぞれ二か所針穴(穴の幅は上下ともに二・二cm)がある。前遊紙一丁ウラ、ノド近くに縦一四・三cm×横二・二cmの極札。上部に、「榊」、その下に二行書で「後伏見院宸翰／斎宮の御くたり」と墨書。その下に「琴山」印あり。この札は、上下にそれぞれ二か所針穴を空けたところ(幅は上部一・三cm、下部一・二cm)に糸を通して見返に付けられている。

【内題】

【書写年代】 鎌倉時代中期〜室町時代前期

【残存状態】 一帖全揃い

【装訂】 綴葉装 一帖

【表紙】 錆鉄御納戸(緑みの暗い鈍い青色)の無地

【見返】 本文共紙。

【本文料紙】 鳥の子紙。

【寸法】 縦一六・二cm×横一五・八cm

【字高】 約一四・五〜一五・〇cm

【一行字数】 一行あたり一四〜一八文字(一筆)

【和歌表記】 歌は二行書。一行目の行頭は一字弱下がるが、二行目は下がらず、そのまま地の文へ続く。

【丁数】 全六折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙に直貼りされている。第一折は五紙、第二〜六折は六紙からなる。前遊紙一丁、後遊紙二丁。このため全六八丁、墨付六五丁となる。

【書入】 後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】

半葉行数は丁によって違う。半葉行数ごとの丁数は以下の通り。

一〇行：一オ・一ウ・四オ・五オ・一一オ・一三オ・
一四オ・一五オ・一八ウ・一九オ・一九ウ・
二〇ウ・二一オ・二三オ・二四オ・三六ウ・
三七ウ・四三ウ

一一行：二オ・三ウ・四ウ・五ウ・六オ・七オ・八オ・

九オ・一〇オ・一〇ウ・一一ウ・一二オ・

一四ウ・一五ウ・一六オ・一七オ・一八オ・

二〇オ・二三ウ・三七オ・四四オ・四六オ・

四七オ・六〇オ・六一ウ・六四ウ

一二行：六ウ・七ウ・八ウ・九ウ・一二ウ・一三ウ・

一六ウ・四六ウ・六〇ウ・六一オ

墨付最終丁である六五オモテは九行である。また、行の最後、左に一〜三字足す書き方をしているため、かなり細かく書き込んでいる。

【保存状態】

良。

【丁数】

全七折。最初の丁は表紙に直貼りされている。第一折は、七紙と一丁からなる（図三）。また、付け足された一丁を挟んで、表紙を含めた第一折と第二折は糊で貼り付けられている。第二〜四折は九紙からなり、第五折は七紙、第六折は六紙からなる。第七折は、五紙と二丁からなるが、後表紙に直貼りされている半丁は、補修時と同じ料紙である。また、この二丁は、ノドの部分で天から五・〇cmの箇所まで補修紙（a）で補強されている（図四）。遊紙はない。このため全／

③夕霧巻（二五七〜二六四）

【作品名】

『源氏物語』「夕霧」巻

【請求番号】

天二二三 一三六一／一五三二

【外題】

縦一・六cm×横二・八cmの題籤。また、上部に二か所針穴（幅二・二cm）があり、糸が少し残っている。下部には糸（幅二・二cm）が残っている。

【内題】

見返のノド近くに、縦一・四cm×横二・二cmの極札。

上部に「夕霧」、その下に二行書きで「安嘉門院四條殿阿仏／まめ人の」と墨書。その下に「琴山」印あり。この札は、上下にそれぞれ二か所ずつ穴を空けたところ（幅は上下ともに一・三cm）に糸を通して見返に付けられている。

【書写年代】

鎌倉時代中期〜室町時代前期

【残存状態】

一帖全揃い

【装訂】

綴葉装 一帖

【表紙】

錆鉄御納戸（緑みの暗い鈍い青色）の無地。

【見返】

本文共紙。

【本文料紙】

鳥の子紙。

【寸法】

縦一・六cm×横一・五・三cm

【字高】

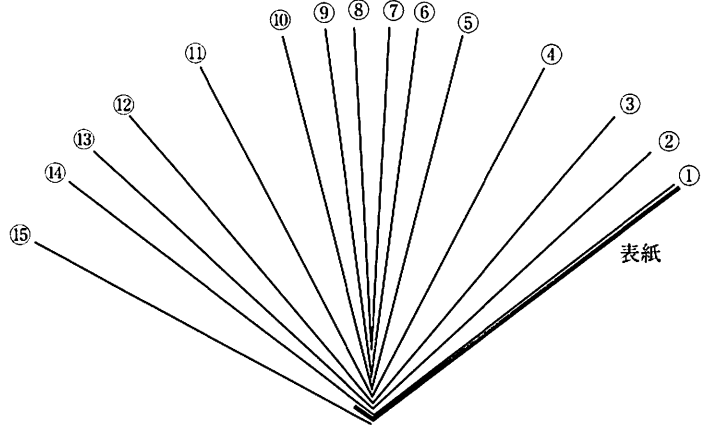
約一四・〇〜一四・五cm

【一行字数】

一行あたり一四〜一七文字（一筆）

【和歌表記】

歌は二行書。一行目の行頭は一字弱下がるが、二行目は下がらず、そのまま地の文に続く。



〔図三 第一折を地から見た図〕

墨付一〇五丁となる。

【書入】 後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】 半葉行数は、十行。ただし、墨付最終丁である第一〇五丁オモテは九行。

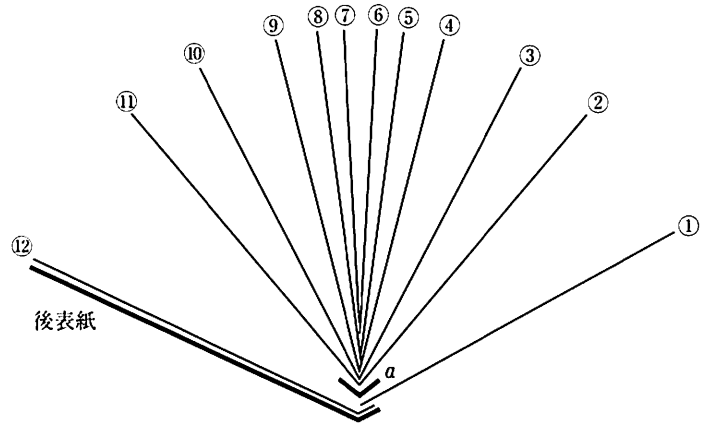
【保存状態】 良。

④若菜下巻(二六五〜四三九)

【作品名】 『源氏物語』「若菜・下」巻

【請求番号】 天二二三 一三六一／一一二五(四)

【外題】 縦二・六cm×横二・八cmの題簽。また、上部に二か所



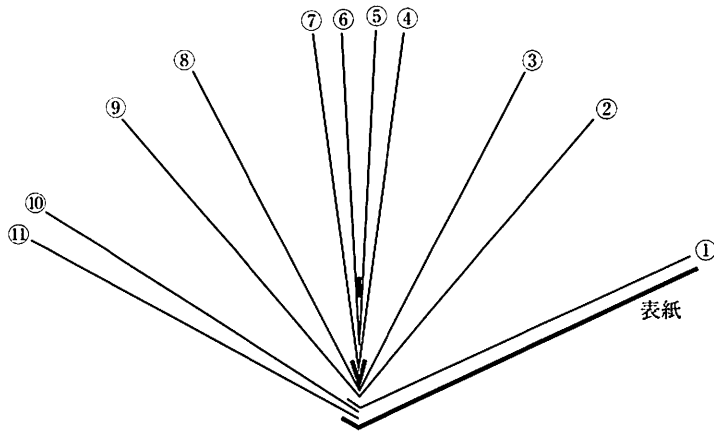
〔図四 第七折を地から見た図〕

針穴(幅二・二cm)があり、糸が少し残っている。下部には糸(幅二・二cm)が残っている。

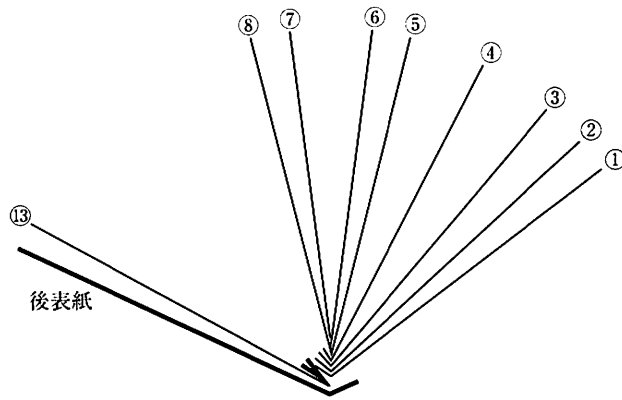
見返のノド近くに、縦一四・四cm×横二・二cmの極札。上部に「若菜下」その下に二行書きで「二條家葉門寛源ノことほり」と墨書。その下に「琴山」印あり。この札は、上下にそれぞれ二か所ずつ穴を空けたところ(穴の幅は上下ともに一・五cm)に糸を通して見返に付けられている。

【書写年代】 鎌倉時代中期〜室町時代前期

【残存状態】 一帖全揃い



〔図五 第一折を地から見た図〕



〔図六 第一折を地から見た図〕

【装訂】

綴葉装 一帖

【表紙】

錆鉄御納戸（緑みの暗い鈍い青色）の無地

【見返】

本文共紙。なお、見返オモテ（製本前の仮表紙か）の中央に「わかかな下」と墨書されている。

【本文料紙】

鳥の子紙。

【寸法】

縦一五・二cm×横一五・五cm

【字高】

約一三・〇〜一三・二cm

【二行字数】

一行あたり二二〜二三文字（一筆）

【和歌表記】

歌は二行書。行頭は一字弱下がる。地の文には続かない。

【丁数】

全一折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙に直貼りされている。第一折は四紙と三丁からなる。また、ノドに三か所、補修紙が貼られている（図五）。第二〜九折は九紙から、第一〇折は五紙からなる。第一一折は、二紙と五丁からなる（図六）。遊紙はない。このため全／墨付一七二丁となる。

【書入】

後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】

半葉行数は、九行。ただし、一丁オモテ〜三丁オモテ、二九丁ウラ、三〇丁（オモテ、ウラとも）は一〇行。墨付最終丁である第一七二丁ウラは二行。また、その

後ろに二行ほど空けて同筆で「なもあみた仏く」とある。

【保存状態】 第一折・第一折の状態が悪いが、他は良。

【その他】 一〇折、一一折ともに、綴糸の結びがある。分厚い巻のため、補強のために行なわれたか。三二丁の下部に製本の際の切り残しがある。

⑤ 藤裏葉巻 (四四〇〜四八一)

【作品名】 『源氏物語』「藤裏葉」巻

【請求番号】 天二二三 一三六一／一一五(五)

【外題】 縦一・六cm×横二・八cmの題簽。また、上部には二か所針穴(幅二・一cm)があり、下部には糸(幅二・一cm)が残っている。

【内題】 見返のノド近くに、縦一四・四cm×横二・二cmの極札。上部に「藤裏葉」その下に二行書きで「冷泉殿為相卿／御いそきの」と墨書。その下に「琴山」印あり。この札は、上下にそれぞれ二か所ずつ穴を空けたところ(穴の間隔は上部一・四cm、下部一・三cm。)に糸を通して見返に付けられている。

【書写年代】 鎌倉時代中期〜室町時代前期

【残存状態】 一帖全揃い

【装訂】 綴葉装 一帖

【表紙】 錆鉄御納戸(緑みの暗い鈍い青色)の無地

【見返】 本文共紙。

【本文料紙】 鳥の子紙。

【寸法】 縦一六・三cm×横二五・八cm

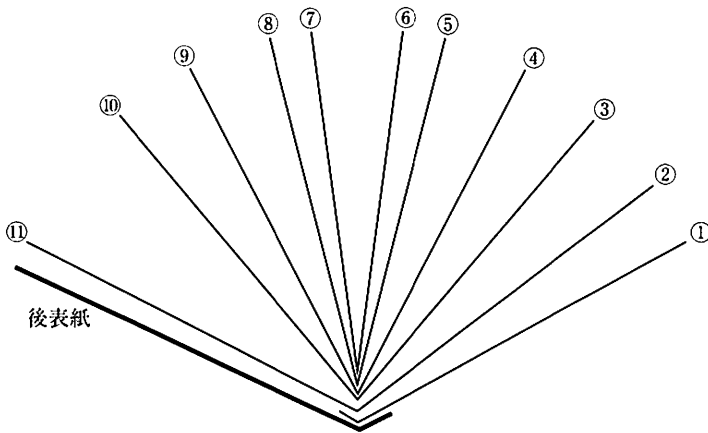
【字高】 約一三・五〜一四・〇cm

【一行字数】 一行あたり一六〜一八文字(二筆)

【和歌表記】 歌は二行書。一行目の行頭は一字弱下がるが、二行目は下がらず、そのまま地の文に続く。

【丁数】 全三折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙に直

貼りされている。第一折は五紙と一丁からなる(図七)。第二折は九紙、第三折は六紙からなる。また、後遊紙五丁。このため全三九丁、墨付三四丁となる。



〔図七 第一折を地から見た図〕

なお、第一折と第二折は背で貼り合わされている。

【書入】

後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】

半葉行数は、十行。墨付最終丁である第三四丁ウラは七行。

【保存状態】

良。

【その他】

後表紙の下中央に、摩耗してはいるが、辛うじて、上下逆に「玉かつら」と墨書してあるのがわかる。かつて、表紙として使用されていた名残か。

⑥野分巻（四八二〜五二〇）

【作品名】 『源氏物語』「野分」巻

【請求番号】 天二二三 一三六一／一―五（六）

【外題】

縦一・六cm×横二・八cmの題簽。また、上下二か所に糸（ともに二・二cm）が残っている。

【内題】

前遊紙ウラのノド近くに、縦一四・四cm×横二・二cmの極札。上部に「野分」その下に二行書きで「冷泉殿為相卿／中宮の御まへに」と墨書。その下に「琴山」印あり。この札は、上下にそれぞれ二か所ずつ穴を空けたところ（穴の間隔は上下ともに一・五cm。）に糸を通して付けられている。

【書写年代】 鎌倉時代中期〜室町時代前期

【残存状態】 一帖全揃い

【装訂】 綴葉装 一帖

【表紙】 錆鉄御納戸（緑みの暗い鈍い青色）の無地

【見返】 本文共紙。

【本文料紙】

鳥の子紙。

【寸法】

縦一六・二cm×横一五・七cm

【字高】

約一四・〇〜一四・五cm

【一行字数】

一行あたり一五〜一八文字（二筆）

【和歌表記】

歌は二行書。一行目の行頭は一字弱下がるが、二行目は下がらず、そのまま地の文に続く。

【丁数】

全三折。第一折は六紙からなるが、最初の丁は表紙に直貼りされている。第二折は六紙からなる。第三折は三紙からなるが、最後の二丁を後表紙に貼付けている。前遊紙一丁、後遊紙一丁。このため、全二七丁、墨付二五丁となる。

【書入】

後世のものが本文の横に墨書されている。

【行数】

半葉行数は、十行。墨付最終丁である第二五丁ウラは四行。

【保存状態】

良。

【その他】

二折目の中心の紙の右側の丁（第一七丁）まで、小口下部に補修の痕跡あり。

⑦玉鬘巻（五一〜五六九）

【作品名】 『源氏物語』「玉鬘」巻

【請求番号】 天二二三 一三六一／一―五（七）

【外題】

縦一・六cm×横二・八cmの題簽。また、上下二か所に糸（上部二・二cm、下部二・〇cm）が残っている。

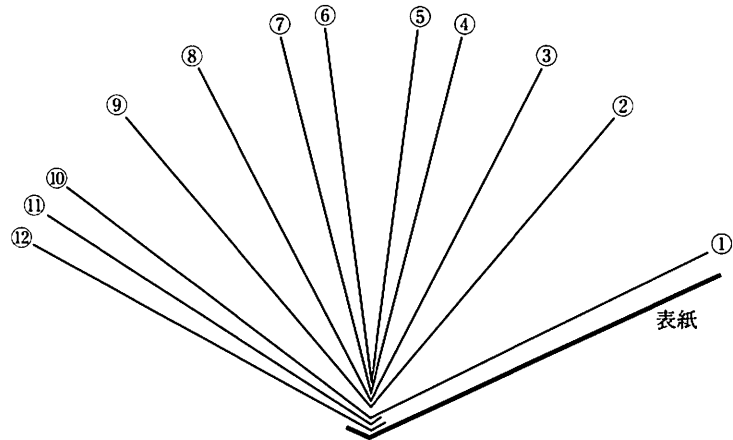
【内題】

見返のノド近くに、縦一四・四cm×横二・二cmの極札。上部に「玉蔦」その下に二行書きで「冷泉殿為相卿／

- 【書写年代】 鎌倉時代中期～室町時代前期
- 【残存状態】 一帖全揃い
- 【装訂】 綴葉装 一帖
- 【表紙】 錆鉄御納戸（緑みの暗い鈍い青色）の無地
- 【見返】 本文共紙。なお、裏側、仮表紙となるところの中央に「玉かつら十七」と墨書。
鳥の子紙。
- 【本文料紙】 縦一六・二cm×横一五・五cm
- 【寸法】 約一四・五cm
- 【字高】 一行あたり一七～二〇文字（一筆）
- 【二行字数】 歌は二行書。一行目の行頭は一字弱下がるが、二行目は下がらない。そのまま地の文に続く。
- 【和歌表記】 全七折。最初と最後の丁はそれぞれ表紙と後表紙に直貼りされている。第一折は五紙と二丁からなる（図八）。第二折は八紙、第三折は九紙、第四折は六紙からなる。また、後遊紙二丁。このため全五六丁、墨付五四丁となる。
- 【書入】 後世のものが本文の横に墨書されている。
- 【貼紙】 一一丁ウラ六行目に「ひさしく」、一二丁ウラ四行目に「いてたつ」との貼紙がある。
- 【行数】 半葉行数は、十行。墨付最終丁である第五四丁オモテ

【保存状態】

は一行。
良。



（図八 第一折を地から見た図）

三. 考察

書誌情報から以下の四点のことが言える。

- ① 【丁数】の項目を見る限り、当該本は、現在の形態になるまでに、遊紙がかなり切られていることがわかる。

②折紙には、「後醍醐天皇宸翰／一 須磨 墨付七十八枚」とあったが、実際には「須磨」巻の墨付丁数は七七丁である。単なる数え間違えということも考えられるが、この巻の第六七丁の次の丁は切り取られている。このことから、この折紙が書かれたときには、切り取られた丁は残っていたとも考えられる。

③「夕霧」巻と「若菜下」巻の題簽上の針穴には、糸が少し残っており、糊で貼られたような痕跡が見て取れる。このことから、題簽を表紙に付ける際に、糸で綴じるだけでなく、糸に糊を使用していたと推測できる。

④「若菜下」巻は、他の巻に比べ、縦の寸法が1cmほど小さい。しかし、本文の周りの余白に違和感がないことから、元々この寸法であったと考えられる。このことから、同じ表紙ではあるものの、「若菜下」巻の伝来は、他の巻とは異なるとも考えられる。

なお、第八帖から第一五帖については別稿を用意する所存である。

*本稿は、JSPS科研費17K13392の助成を受けたものである。

*貴重な資料の翻刻・掲載をご許可くださった鹿児島大学附属図書館に厚く御礼申し上げます。

注

注1 鹿児島大学附属図書館の玉里文庫には、「源氏物語」が二セットある。本稿で扱うのは、一五帖のみのもので箱に「古筆源氏物語」とある。もう片方は、五四帖揃いで、豪華な漆塗の箱に入れられたものである。

注2 徳光澄雄「鹿児島大学附属図書館蔵 玉里文庫本古筆源氏物語について」『語文

研究』二三号、一九六七年四月

注3 新美哲彦「鎌倉時代における『源氏物語』の書写態度―空蝉巻における陽明文庫本と玉里」『国文学研究』一五七巻、二〇〇九年三月

注4 「源氏物語 原本データベース」(二〇一八年七月三〇日一四時〇〇分閲覧)
http://base.lnjl.ac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTm&C.CODE=0091-027603&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=null&SHOMEI=%E3%80%90%E6%BA%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%AA%9E%E3%80%91&REQUEST_MARK=null&O Wiener=null&BD=null&IMG_NO=1

注5 「列帖装」という名称もあるが、本論では「綴葉装」で統一する。

注6 判読不可能な字は「■」で示す。

注7 玉里文庫の請求番号も、この折紙の巻の順番に則っている。

注8 サイト(注4)の画像の順番では、「須磨」巻の中に折紙が入っているかのようであるが、論者が閲覧したとき(二〇一八年七月)には、折紙は「須磨」巻の上に置いてあった。

注9 図解で太線にしている箇所は、表紙・後表紙・補修紙を示す。